



さら

しな姨捨にまつわる川柳・狂歌

2025年のNHK大河ドラマ「べらぼう〜蔦重栄華乃夢噺〜」には、江戸中期の時代や為政者についてユーモアや風刺をもって57577で歌う「狂歌」がたびたび登場しました。ドラマで描かれた時代には、やはりおかしみのある575のリズムの「川柳」も盛んに作られています。さらしな姨捨にまつわる川柳と狂歌が載る文献が手元にありました。まず川柳からです。

川柳についての文献は、「川柳信濃國」（母袋未知庵著）です。この本は1949年、松本市のしなの川柳社が出版したもので、江戸の川柳雑誌「柳多留」

【川柳】

五六杯喰らって伯母を捨てに行き
大食の国は月までたんと見え
大飯を食ひ沢山な月を見る
捨てられた姨もぜんたい喰らい抜け
田毎程信濃へ団子盛ってやり
月を眺めて御座れよと姨を捨て
月が見て居たので姨を背負い戻し
姨捨は道のわからぬ世の話
人情に欠けても月は名所也
おひおひと月に泣いたる名所也
賑かさ田毎にうつる田植笠
月のやう並ぶ田毎の田植笠
早乙女の笠も田毎の昼の月
キックリチョンと鏡台へ月が出る
鏡台の月あゝの田にもこの田にも
鏡台にうつして眺む月の眉
風吹くと田毎の月は皺になり
信濃から来て名月を一つ見る
更科で蕎麦ばかり喰う不風雅さ

【狂歌】

姨捨の山のつきかげあはれさにうしろにおひて帰るまで見つ（真顔）
入月をおしむ心のあらはれて我が影法師ものびあがりけり（高住）



などに掲載された作品の中から信濃（長野県）に関するものを抜き出して編纂しています。信濃の人間ではなく江戸の人間が詠んだもので、その意味で当時の信州人が江戸っ子からどう見られていたかもよく分かる構成になっています。

さらしな姨捨は、やはり江戸でも有名なだったのでいくつも川柳が載っています。その中ですぐ暗記してしまったのが次です。

月が見て居たので姨を背負い戻し

姨捨山の頂上に母親を捨て置いて村の戻ろとした息子が、月がすっかり自分の行いを見ていることに気がついて、母親

を家に連れ帰ろうとする様子を詠んでいます。月を擬人化して人前では恥ずかしいことはできないと我に返った息子の真面目さと気まぐれさが一緒にあって苦笑してしまいました。

「川柳信濃國」には、江戸時代の川柳を収集した著者母袋未知庵さんによる解説文もあり、読み応えがあります。それによると、江戸時代、信州から農閑期の冬には江戸に出稼ぎにいく人が多く、そうした人たちは江戸っ子には大飯食いと映り、山の国から来た粗野で鈍重な人間だからかわれていたことが分かるそうです。そんな信州人の印象を持つ江戸っ子たちの作った川柳が次。

五六杯喰らって伯母を捨てに行き

大食の国は月までたんと見え

田毎程信濃へ団子盛ってやり

2句目と3句目は信濃の国の自慢である「田毎の月」を文字った川柳。大飯食いだから一つしかない月もたくさん見えるんだとか、えらい言われようですが、裏を返せばそれくらい「田毎の月」は江戸でも知られていたということです。

そして、さらしな姨捨にまるわる狂歌です。姨捨文学研究の第一人者矢羽勝幸さんの「姨捨いしぶみ考」からです。二首紹介されています。一つは

姨捨の山のつきかげあはれさに うしろにおひて帰るまで見つ

真顔

真顔は「べらぼう」にも登場し、「世の中に蚊はどうるさきものはなしぶんぶといふて夜もねられず」という儉約を奨励した老中松平定信を批判する狂歌の作者とうわさされた大田南畝の弟子です。地方に狂歌を広めた功労者だそうで、当地への来訪時に詠んだ歌です。

それゆへこの歌も狂歌というジャンルに括られますが、「姨捨の月の光りがありにもあはれなので背中に背負って帰りたいほどだ」という心の感動を詠んでいます。「うしろにおひて」の表現が、老婆を山に捨てに行くとき載せる背中のイメージと重なるのでややパロディー色を感じますが、「帰るまで見つ」と続いていることから、何度も振り返って月を惜しんでいた様子がうかがえます。

もう一つは真顔の弟子の高住の作。 入月をおしむ心のあらはれて わが影法師ものびあがりけり

さらしな姨捨の名月が明け方、山に沈んでいくのが惜しくて、背伸びして山の向こう側まで覗きたいくらいの気持ちだったとき、地面に映る自分の影も背伸びしているように感じた心の動きを詠んでいます。これも情景が微笑ましく、まんがの場面が浮かぶ歌です。

これら2首は歌碑となって、松尾芭蕉が立ち寄った長楽寺（千曲市八幡姨捨）の境内にある、月見堂の近くに建っています。